

## FCT オープン・フォーラム 「東日本大震災とメディア・リテラシー」報告

2011年8月7日、FCT第14回研修セミナーの一環として、「東日本大震災とメディア・リテラシー」をテーマにオープン・フォーラムを開催した。秋田県、福島県、東京都、神奈川県、大阪府、京都府などから研究者、教師、メディア、NPO、地方議員など多様な人びとが参加し熱心に討議した。

当日のプログラムは次の通りであるが、ここでは第1部を中心に報告し、詳細な分析データや、第2部、第3部の報告は後日発行予定の報告書に掲載を予定している。なお、FCTでは引き続き東日本大震災報道の分析を継続中であり、機会を設けてフォーラムを開催したいと考えている。

### 第1部 原発震災直後の報道を考える

- ・ドイツよりメッセージ（ゴスマン・ヒラリアさん/トリア大学教授）
- ・FCT東電福島第一原発事故報道分析プロジェクト中間報告  
FCT東電福島第一原発事故報道分析プロジェクトについて  
3月14日夜の各局ニュース分析（中間報告）
- ・ゲストスピーカーからの発言  
井上輝子さん（和光大学教授）  
石塚さとしさん（『マスコミ市民』編集長）  
全国紙記者 Nさん

### 第2部 メディア・リテラシーワークショップを体験する

～震災3ヶ月後のニュース報道を使って

### 第3部 メディア・リテラシーの日常化とは～会場との対話

## 第1部 原発震災直後の報道を考える

開会にあたって司会者より趣旨説明、ゲスト紹介に続いて、ゴスマン・ヒラリアさんのメッセージを紹介して、分析プロジェクトの中間報告を行った。それに引き続いてゲストから発言をいただいた。

**司会** みなさん、本日はFCTオープン・フォーラム「東日本大震災とメディア・リテラシー」にお集まりいただきありがとうございます。

3月11日の大地震、津波、そして、福島第一原発の1号機から4号機までの大事故による放射性物質が大量に放出されるという、あつてはな

らない事態に私たちは直面していて、いまでもその渦中にあります。冒頭に、亡くなった方がた、行方不明の方が2万人以上もおられ、事故から5ヶ月経ったいまでも9万人近い方々が避難所生活を強いられていることを深く心に止めて、犠牲になった方々に心からの哀悼の気持ちを捧げたいと思います。

さて、FCTはすべてボランティアな運営によって成り立っているごく小さなNPOですが、創立以来、市民の視座から実証的にメディアを分析して一人ひとり人間として、メディア社会に対して発信をしていくという基本的な理念のもとに運営されてきました。

今回の大震災にあたって、まず震災直後のニュース報道の分析をはじめていたわけですが、そこに偶然、FCTのメンバーでありドイツ在住の研究者であるゴスマン・ヒラリアさん（トリア大学教授）がまさに地震が起こったその日に日本に到着するということがあって、私たちの分析グループに合流してくれました。ゴスマンさんから東日本大震災直後のドイツ大使館の対応やチェルノブイリの経験をしているドイツでの報道と比較をして、日本社会の対応があまりにも違うこと、などを話し合う中で、震災後のメディア報道について私たちが感じてきた違和感、モヤモヤした疑問について具体的にメディア分析をすることを通して考えようとしてきました。

今日、FCTからは3月14日、震災から3日目のニュース報道の分析について中間報告をしますが、それを一つの手がかりとして今日お招きしたゲストスピーカーの方々や、会場のみなさんと一緒に原発震災報道について、さらには日常的にメディアを分析的に捉えることの意味を考えたいと思います。

次にお忙しい中をお越しいただいたゲストスピーカーの紹介をさせていただきます。

まず、これまでさまざまな形でFCTにご協力をいただき現在も鈴木みどりメディア・リテラシー研究基金の選考委員にもなっていて和光大学教授の井上輝子さんです。次に震災後、テレビや新聞とは違った角度で情報を発信している『マスコミ市民』編集長の石塚さとしさんです。3人目は新聞記者のNさんです。Nさんは亡きFCT創設者の鈴木みどりさんが立命館大学で教えておられた時に大学院でメディア・リテラシーを研究されました。

引き続き、分析プロジェクトの中間報告に入ります。

## ●FCT 東電福島第一原発事故報道分析プロジェクトについて

### 1. 調査にあたっての問題意識

- 1) FCTは、1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災2日目のテレビのニュース報道を分析し、突発的に起こった災害時にテレビ局がどのように対処したかを客観的に検証することを通して、それぞれの局が日常的にどのような基準で「現実」を構成しようとしているのかを調査分析した。分析調査を通して日常的にテレビをクリティカルに読み解くことのできる力をつけていく重要性を再認識することになったのである。
- 2) 今回、3月11日に東北・関東地方を襲った地震、津波、東電・福島第一原発事故の影響はとて大きく、5ヶ月を迎える今も被災地では困難な生活が余儀なくされている。特に東電・福島第一原発事故については、地球規模の放射性物質による汚染が報告されているが、低線量被曝や食品、土壌の汚染を含め被害の全貌が見えず、事故の収束についても見通しは明らかではない。
- 3) 原発震災に関しては、発生直後よりテレビや新聞など主流メディアの報道に対しては、政府発表をなぞるだけという批判がされている。一方で日本でも30年以上、原発に反対し、今回のような事故に警鐘を鳴らしてきた専門家市民によるインターネットサイトが「もう一つの情報源」として大きな威力を発揮してきた。結果として、主流メディアと、専門家市民によるインターネット上で発信される事故の捉え方について大きな乖離が表面化し、主流メディアのジャーナリズムとしての存在意義が問われている。
- 4) しかしながら、日本社会ではテレビや新聞を基幹メディアとして無視することができないのも事実である。そこで、市民の視座から震災報道をクリティカルに分析し実証的なデータをつくり、私たちが発言する根拠、ことばと論理を獲得し、能動的に社会にたいして発言していく必要がある。
- 5) この分析を通してメディア社会を生きる私、私たちが自らを内省し、今なお続く深刻な事態をどう受け止め、考え続けていくのか、そのための「基礎体力」を獲得することが求められている。そして、実証的なデータを創ることによって、それを根拠に、ジャーナリズムとしてのメディアの機能を問い、よりよいメディア環境をつくっていくことが重要である。

## 2. 分析調査の目的

原発事故発生4日目の3月14日(月)の夜のニュース報道が原発事故について何を伝えていたのか・伝えていなかったのかを映像技法、および社会的・政治的・経済的文脈を含めて分析し、明らかにする。

## 3. 分析対象 (発言順)

- ① 2011.3.14 日本テレビ系「NEWS ZERO 東日本大地震」(22:00~23:56)
- ② 2011.3.14 NHK「ニュース・ウォッチ9」(21:00-24:00)
- ③ 2011.3.14TBS系「ニュース23クロス特別番組」(21:00~0:50)
- ④ 2011.3.14 フジテレビ系ニュース JAPAN 特別番組(22:00~24:00)
- ⑤ 2011.3.14「テレビ朝日系報道ステーション」(20:57~23:07)

## 4. 分析方法

分析対象とした各局の番組を録画し、そのVTRを見ながら「ニュース番組の構成」記入シートを使って各番組の構成の流れを分析する。その際、ニュース項目の内容、時間量、CM時間量を書き出す。次に完成した「ニュース番組の構成」記入シートの情報をもとに各番組を次の観点から分析する。

- 1) 各局の番組で、東日本大震災を取り上げるニュース項目を内容別に分類し、その時間量と全番組時間(CMを除く)に占める割合(%)
- 2) 原発事故を伝えるキャスター/コメンテーター/記者、番組に招かれた専門家
- 3) 各番組で原発事故を伝える特徴的なニュース項目を選び、映像技法、音声技法を文字化して分析する
- 4) 分析の過程では、原発事故をめぐる社会的な議論を可能な範囲でフォローし、分析担当者で共有することにつとめた。

## ●3月14日夜の各局ニュース分析(中間報告)

- ① **2011.3.14 日本テレビ系「NEWS ZERO 東日本大地震」(22:00~23:56)**  
報告 佐々木はるひ

### 1. 番組の概要

村尾信尚メインキャスターは、取材先の石巻市赤十字病院前から、中継で番組冒頭のあいさつをします。

番組の前半は被災地と被害者の取材VTRと、被災地の空撮映像、イラスト、CG等で被害状況を検証しています。スタジオから村尾キャスターに、「被災者が今何を求めているか」を問いかけますが、それに対して

は、現地にいる田中淳東京大学教授（災害被害に詳しい）が、状況を分析して応えています。津波についても、東大地震研究所に取材をして、古村孝志教授にインタビューし、さらに地図、CG、VTR を使って解説しています。

後半は監視カメラが撮影した福島第一原発3号機爆発の瞬間映像から始まります。この爆発映像は枝野官房長官の会見、避難した住民のインタビュー、原発の解説、東京電力の会見場面等の間に繰り返し使われています。原発内で何が起きているかを、専門家として松井一秋氏（エネルギー総合工学研究所）が解説しています。事故のレベルについては、スタジオ内にある大型モニターのレベル一覧表を見ながら、レベル4の現在は深刻な状況ではなく、レベル5にならないように、原子炉を冷やし続ける作業をしていると、桜井翔キャスターが説明しています。

次に、計画停電実施に関する現在の状況を伝えています。停電実施の瞬間映像（店の明かりが消える瞬間）、ヘリコプターから見る実施地域の暗くなった映像などと、計画停電に伴うスーパーでの買いだめや、ガソリンスタンドの長蛇の列、混乱する駅の状況等、市民へのインタビューを交えて取材しています。

再度各地の被害状況をまとめたあと、震災に対する海外、スポーツ界等の動きも短時間ですが伝えています。

## 2. 原発事故を扱ったニュース項目：No.13、No.14

スタジオ内にある大型モニターで、監視カメラが撮影した11時1分に福島第一原発3号機が爆発する瞬間の映像から始まります。この映像はこのあと何度も繰り返し使われています。

枝野官房長官が「3号機から煙が出ている可能性、爆発か爆発のおそれがあり確認中」とコメントをしますが、映像では爆発で煙が高く上がり炎も出ているのがわかる監視カメラが捉えた爆発の瞬間映像が使われています。

爆発瞬間映像と爆発前の映像とを比較すると建屋の外壁が吹き飛んでいるのがわかります。（爆発前と爆発後の左右2分割映像）

同時刻に東京電力も会見中でした。爆発が起きたことは、会見場に來ている記者から伝えられ、東電社員が状況を聞いている場面もありました。

水素爆発はなぜ起こったかを局側は、「外側から、建屋、格納容器、原子炉圧力容器の順で守られ、中心では燃料棒を冷やすため常に冷却水に浸された状態を保たれています。地震で運転は自動的に停止しましたが、給水装

置の電源が切れたため冷却水の水位が下がり、燃料棒が露出し温度が上昇しました。高温の燃料棒がまわりの水蒸気に触れると水素が発生します。容器内の圧力が高まり、破裂を防ぐために弁を開いた結果、水素が建屋の中に充満して、爆発を引き起こしたとみられます。」と解説しています。

枝野氏の会見では、「格納容器の健全性は維持されているものと思われる」と述べています。「吹き飛んだのは建屋の外壁のみで、中の容器は破損していないと見られています。」と局も説明しています。

東京電力は、2号機が13時25分に原子炉冷却機能喪失と判断して、海水の注入を始めましたが、ポンプ車が不足したため、その後2号機の水位は一向にあがらず燃料棒がすべて冷却水から露出して、一時むき出しの状態になりました。松井氏は「冷却が十分でなければ炉心溶融になる可能性もあるにはある」と述べています。1号機3号機では既に発生している可能性のある炉心溶融とは、燃料棒が露出し温度が上がり燃料棒が溶け出す現象で、万が一容器の下に垂れ落ち容器が破損すると大量の放射線物質が外に放出しこれを防ぐため冷却水を注入し続ける必要があります。」とコメントしています。

### 3. 考察

前半は村尾キャスターが石巻市赤十字病院前から生中継で、取材してきた被災地、被災者の報告が中心です。特徴として、各項目のテロップで『かつてない大震災』『とんでもない悪魔だ』『想定超えた大津波』『消えた町』など、センセーショナルなタイトルがつけられています。

後半は、監視カメラが捉えた福島第一原発3号機爆発の瞬間映像ですが、この場面はNo.13とNo.14の約15分間にたびたび出てきます。数えてみると19回も繰り返し登場していました。

CMは、116分28秒の番組中21分30秒で、その半分以上の12分が、番組終了までの約35分間に集中していました。

空高く煙と炎が上がる映像が19回繰り返され映像では危機感を感じさせる場面になっている反面、会見やナレーションでは「健全性は維持、中の容器は破損していないと見られています」と述べていることに違和感を持ちます。原子炉の内部をCGで解説する部分でも、外壁が大きく破損している映像に対し、内部がしっかり守られ冷却作業が再開したことで安心感を与えようとしています。放射線量の1時間あたり20マイクロシーベルトは、「人体に影響を及ぼす値ではない」と言い切っていますが、今見ると、更に大きな違和感を持ってしまいます。震災からまもなく5ヶ月になります、このプロジェクトで、改めて震災直後のニュースを見ると、本当に伝えてほしいことが伝えられていなかったのではないかと思います。

## ② 2011.3.14 NHK「ニュース・ウォッチ 9」(21:00-24:00)

報告 田島知之

### 1. 番組の概要

放送時間全てが震災関連のニュースに割かれています。スタジオには通常時と同じ2人のキャスター（大越健介・井上あさひ）に加えて、トピックによって専門家や解説者が登場します。原発については関村直人東大大学院教授と山崎淑行科学文化部記者、地震のメカニズムについては松本浩司解説委員が登場しています。

トピックのなかで最も多いのが、「被災地」の情報です（番組全体の時間量に占める割合は54.1%）。安否不明の人々や被災した自治体の様子について伝えられています。ここでは各地の避難所からの中継や取材をもとにしたビデオが使用されます。また今回の震災報道の特徴と考えられますが、市民（多くの場合「視聴者」と呼ばれます）が手持ちのカメラや携帯電話等を使って撮影したと思われる映像が、各地の津波の実像を伝えるために多用されています。

次いで時間量が多いのは「原発事故」についてのニュース（20.1%、詳細は後述）です。

また時間量で原発事故とほぼ同じ程度を占めているのが「首都圏」関連のニュースです（19.0%）。その全てが計画停電とそれに伴う混乱についてのニュース、翌日の停電情報であり、番組のなかでは後半に配置されています。

「その他」のニュース（6.8%）は被災地中心の気象情報、震災を受けた株安のニュースなどです。「海外からの反応」についてのニュースはありません。

時折VTRを中断するかたちで、記者会見や被災地からの中継が入り、震災直後のあわただしい雰囲気をつかかせています。

### 2. 原発事故を扱ったニュース項目：

No.1、2、3、6、8、24

2号機への海水注入が一時中断していたことが伝えられ、また番組開始直後に原発周辺で放射線が検出されたとの一報が入ります。そのため2号機で水位が下がることによる「空焚き」と、それにとまなう炉心溶融が起こっていないかどうか番組内での最大の関心事となっています。この点について専門家は、空焚きの可能性があり、炉心溶融が考えられると発言しています。対策としてはとにかく海水注入による冷却の継続

が必要であるとし、番組後半では、燃料棒の半分が水に浸かったという知らせがあり、それを受けて直近の危機は去ったとしています。またこれまで日本では「過酷事故」の想定が十分でなかったとの発言があります。

・事故の影響と放射能被害について

このように炉心溶融の問題に重点がおかれているため、事故の影響や放射能についての情報は比較的少なくなっています。山崎記者が近隣住民に対し、避難指示に従い、原発には近づかないようにと述べます。また相馬市長とキャスターとのやりとりのなかで原発事故からの避難者が多数にのぼることが述べられ、福島放送局からのレポートではスクリーニング検査が行われていることが伝えられます。

・市民へのアドバイス

スタジオで山崎記者によって、避難指示の出ているエリア内にとどまっている人に対して、マスクなどで口・鼻を覆う／皮膚の露出をできるだけ抑える／手や顔を洗う／外に放置されているような食べ物は口にしない、の四点が呼びかけられています。

### 3. 考察

この時点で炉心溶融の可能性があることははっきり述べられています。ただ、基本的に安全であるか危険であるかということについて述べることに慎重な姿勢がとられています。原発事故に関しては新しい情報が入るたびに一喜一憂する状態で、そもそも情報が不足しているか、あるいは情報が出されていないために断言ができないだけのように見えます。また実際に炉心溶融が進行した場合、それが何をもたらすのか、どういう意味をもつのか、ということについて深く突っ込まれる場面はみられません。

### ③ 2011.3.14TBS系「ニュース 23 クロス特別番組」(21:00~0:50)

報告 新開清子

#### 1. 番組の概要

番組は松原キャスターと木村祐郎（防災専門家）が被災地をへり取材する映像からスタートし、津波被害、原発事故などの現地レポートを繋ぐというのがトップニュースです。番組全体では、原発事故関係のニュース項目の時間量が最も大きく 45%を占めています。それにともない、番組の構成としても、原発事故関連記者発表を、最優先して中継で伝え、



これを受けてスタジオで専門家がコメントをするという設定が中心になっています。津波による被災地のレポート、計画停電・首都圏の混乱などは、現地レポートを交えスタジオから伝えています。その他に、「報道カメラ」として、中国など海外からの援助や、米軍の被曝とその後、石原発言、プロスポーツ界の支援なども伝えます。また、松原キャスターはヘリ取材をして、救助の届きにくい津波の被災地域に着目して紹介しています。(No.29)

CMは、AC広告を中心に、23時台、0時台に頻繁に挿入され、番組全体で45分45秒ともなり、総時間量の約20%もしめています。

2. 原発事故を扱ったニュース項目:No.1,2,4,5,7,9,11,12,24,28,30,33,34で、今回はNo.28を中心に分析をしています。

① 情報源: 共通記者会見として枝野官房長官(首相官邸)、東京電力(東京本社、福島現地)、原子力安全・保安院の発表を伝え、独自取材では二本松市男女共生センターのスクリーニングを受ける市民へのインタビューがあります。(No.28)

② 映像の特徴: 原子炉建屋の外部、及び内部の東京電力資料映像が多用されています。スタジオでは格納容器のフリップを見ながら専門家が説明する顔のクローズアップや、津波被害を受ける原発の遠景の映像もリピートして映されています。

③ 登場する専門家: 番組の前半は寺井隆幸(東京大学大学院工学系研究科教授・日本原子力学会他多数団体に所属)、後半では山名元(京都大学原子炉実験所教授・元動燃研究者で再処理開発に従事)です。

④ 福島第一原発の状況について何を伝えているのか

・番組ではNo.4で原発事故の今日一日のドキュメントをまとめ、その後は状況の推移をたどり、共同記者発表ごとに伝える構成です。

・午前11時には3号機が水素爆発し、その後、冷却水の注水が再開されたと伝えています。スタジオの寺井教授は「水素爆発はあったが、ある程度冷却水に浸っているので、それほど悪い方へはっていないというのが私の印象です」とコメントしています。

・2号機では冷却水の水位の下降が続き、午後6時過ぎには、一時、燃料棒が全露出したことを伝え、東電は「放射性物質が放出されるおそれは否定できない」と持って回ったような発言をしています。

・その後、2号機の冷却水の水位は少し回復するものの不安定な状態が続いていると伝え、スタジオの福島TBS解説委員は「燃料溶融、炉心溶融という悪いシナリオも考えられる」と述べ、山名教授は「格納容器

はタフなので、まだ余裕がある。圧力を下げる作業が急がれる」とコメントしています。

・午後 11 時過ぎに再度、燃料棒の全露出が報じられ、山名教授も「弁が閉まり、圧力が上がっているのは深刻、冷却機能を果していない」と、初めて深刻な事態を認めています。さらに、深夜の東電会見で、福島第一原発正門付近の放射線量の計測データが 3,130 マイクロシーベルト（毎時）に上昇したと発表しています。

・放射能被害については、3 号機爆発の際に、東電社員ら 11 人が負傷し、6 人が被曝したと、ヘリで移送される映像とともに伝えています。また、正午過ぎには、原子力安全・保安院より、20 キロ圏内周辺住民の屋内退避のお願いの発表があったことを伝えています。

・独自取材のインタビューでは、若い母親 3 人が 3 号機爆発を機にスクリーニングを受けに来て、「幼い子どもの被曝が心配、詳しい情報が知りたい」と取材する萩原キャスターに、しっかりとした口調で訴えています。これに対するスタジオの山名教授のコメントは「放射性のものが一部、爆発で空気中にただよい衣服についたので、早めに落とす方がよい。今の感じでは全然問題はない。我々は自然界にあるラドンガスという放射線ガスを吸い込みながら生きている」というものです。

### 3. 考察

番組に多く登場する東京電力資料映像は、原発の安心、安全をイメージする PR 映像であり、1 号機、3 号機と相次いで爆発を起こし、鉄骨むき出しとなっている現状とはかけ離れたものです。また、2 号機ではメルトダウンが生じていたので、建屋内部の資料映像とはまったく異なり、問題を感じます。

専門家のコメントとして、当初は、東電に復旧作業を期待するコメントが続きましたが、夜になり、2 号機で再度、燃料棒が全露出するにいたり、初めて、深刻な状態を認めるコメントをしています。しかし、被災者のために、メルトダウンを認め、それにとまなう放射性物質の放出の危険性を呼びかけることは、なおざりにされています。

原発事故中心の番組構成については、事故後、5 ヶ月近く経っているにもかかわらず、新たな問題が次々に生じている現状を考えると、原発事故を主に伝えようという構成は評価されるものですが、原発推進派の専門家の選択には疑問を感じます。

独自取材のインタビューでは、子どもの将来を心配する若い母親 3 人に取材していますが、インタビューされる女性たちの言葉をゆっくりと

うなずきながら聞く萩原キャスターのスタンスと、東京のスタジオのキャスターや、専門家のコメントとの間には、同一番組の中で距離感が生じていると感じられました。

さらに、取材されるのは全員女性ですが、番組制作サイドは、スタジオの膳場キャスター以外、キャスター、解説者、専門家、ナレーターと全員男性というバランスを欠いた設定です。また、子どもの将来を不安視するのは親であれば、性別に関係ないはずですが、子育てイコール女性の役割という先入観があるために、映像には父親も登場しているのに、母親のみインタビューをするという偏った選択がされてしまったのではないかと思われま

#### ④ 2011.3.14 フジテレビ系ニュース JAPAN 特別番組(22:00~24:00)

報告 森本洋介

##### 1. 番組の概要

番組の概要としては、3月14日の被災地の様子および被災地避難所からの中継、そして福島第一原発3号機の被害状況の報告で構成されています。また、福島第一原発2号機の様子(海水注入作業、燃料棒の露出「空焚き状態」)に進展があれば、リアルタイムの情報を伝えながら、専門家である澤田教授に意見を聞くという場面がところどころで差し込まれます。

一方、中林教授は防災関係の専門家であり、地震・津波被害に対する対処法について意見を述べる役割を担っています。そして首都圏の混乱状況については、計画停電についての情報と、渋谷で明かりが消えたり主な鉄道駅で混乱が起こっていたりという情報がそれぞれ半分ずつ流されています。

量的にも示されていますが、以上のように放送時間帯およびニュース項目については、特に偏った項目がなく、またCMの量が他局と比べて圧倒的に少ない、つまり本放送が多かったことが特徴として挙げられます。

##### 2. 東京電力福島第一原発事故を扱うニュース項目

No.7, 9, 12, 14, 20, 23, 28(特に12と14)

3月14日の福島第一原発の事故について、福島第一原発2号機への海水注入作業の状況がところどころで報告されています。特に2号機の燃料棒の様子(「空焚き状態」になっていないか)をキャスターが澤田教授に何度も確認する場面が見られます。この際、澤田教授は「現場の詳し

い情報はわからないが」と述べながらも、基本的に燃料棒に水が注入され、「空焚き状態」になっていなければ大丈夫だとコメントしています。

事故の影響と放射能被害については、孤立した双葉厚生病院で救助を待っているときに福島第一原発3号機が水素爆発して被爆した人々(入院中の患者や家族、病院の職員たち)に対して、人体の影響について着目して独自取材を行っています。二本松市内において、除染作業を行っているテント前から記者がレポートを行っており、除染作業を受けた病院職員に対してインタビューしています。また、このVTRと関連して、都立駒込病院放射線科の唐澤医師にコメントを求めています。唐澤医師は「地域住民は、病院職員のように放射性物質が身体に付着する外部被爆と、放射性物質を吸い込む内部被爆の両方に注意を払う必要がある」、「放射線の影響を受けやすい子どもについて特に注意が必要」、「もし子どもが外出する場合はですね、濡れたタオル等で口を覆いながら、なるべくダストを吸引しないようにして行動すると、まずそういうことが必要なのではないかと思えます」といったことを説明しています。

唐澤医師のコメントに前後して、スタジオやVTR中でも市民に対してアドバイスを行っています。スタジオで澤田教授が行った体内被ばく防御方法として、「家から出ない」「シャワーで洗う」「顔を露出せず濡れタオル」「ビニール袋などに服を入れる」といったことが紹介されています。

またVTR中に、ナレーションで「原発のある自治体『ヨウ化カリウム』を備蓄」、「昆布の代用も有効」といったことも述べています。

### 3. 考察

原発事故に関しては、現地の除染作業の様子映像や、除染を受けた市民へのインタビューをするなど、独自取材が行われており、その点は評価できます。しかし、放射能への対策については現実的に疑わしいもの、信ぴょう性の薄いものが目立ちます。例えば、「ヨウ化カリウム」が何に役立つのかを述べておらず、「昆布の代用も有効」ということの根拠が示されていません。また現実的に「外に出ない」といったことは不可能であり、「ビニール袋などに服を入れ」た後の処理方法についても述べていません。「シャワーで洗う」といっても、水道が復旧していなければ洗うことはできません。

一方、福島第一原発2号機の空焚き状態については、仮に空焚き状態になった場合に、何が起こりうるか、どのような事態になりうるのかを専門家は説明していません。リスクも含めて説明するために専門家は必要とされるのであり、無用な混乱や不安を煽る恐れがあるためにリスク

について説明しないというのは、専門家としての役割を果たしていないと思われま

最後に、「体内被ばく」、「内部被ばく」といった用語の使用が曖昧です。また「外部被ばく」と「内部被ばく」の対処法を明確に区別していないため、対処法と用語が噛み合っていない場面が見られます。基本的に番組内で紹介されている対処法は「外部被ばく」に対してのものとなっていますが、スタジオで説明がなされる際のフリップには「体内被ばく」と書かれています。唐澤医師は「内部被ばく」とその直前のコメントで述べているので、視聴者としてはその2つが同じものなのか、それとも異なるものなのか、理解しにくい構成になっています。VTRでは「病院職員のように放射性物質が身体に付着する外部被ばくと、放射性物質を吸い込む内部被ばくの両方に注意を払う必要があると専門家は指摘する」と説明されていますが、その後の対処法に関しては「内部被ばく」を想起させるような構成になっており、視聴者に混乱を招きかねない報道になっています。

#### ⑤ 2011.3.14「テレビ朝日系報道ステーション」(20:57~23:07)

報告 西村寿子

##### 1. 番組の概要

番組は冒頭、古館キャスターの「何ができるのか、何を助け合うことができるのか」という発言から始まります。トップニュースは「福島第一原発2号機燃料露出の炉内に注入再開」という原発関係のニュースになっていますが、最も時間を割いているのは、計画停電、計画停電による首都圏の交通混乱、通勤ラッシュです。しかし、その扱い方も計画停電予定表をそのまま映し出すなど政府発表や東京電力の発表をなぞるだけであり、「被災地の混乱や苦労を考える」と計画停電や通勤時のラッシュなどは「同じ日本人として我慢すべき」ものであり、それこそが冒頭の発言にある「助け合い」の中身として捉えられています。

番組は、計画停電やラッシュ時の混乱に対して粛々と状況を受け入れる姿を「日本人」として賞賛していますが、市民の中には「仕方がない」諦めている人びとだけではなく、「なぜ、いま、計画停電が必要なのだ」と疑問を持った人もいるはず

です。3月14日という地震から3日目、福島第一原発では、3号機、1号機の爆発に続いて2号機の冷却が中断するという緊迫した状況にあって、番組では計画停電などを準備する場合なのか、本当に必要なのか、という問いかけはまったくありません。

計画停電、通勤時のラッシュや混乱に続いて、被災地の状況を「甚大な被害 困難な救助 それでも・・・被害地でのきずな」というテロップを付けて VTR で伝えています。

海外からの反応を伝えるニュース（NO.15）では、ワシントン、北京でも原発事故に注目が集まっていると伝えています。ニュース全体の構成は原発事故の規模や影響を極力小さく扱う構成となっており、違和感を与えています。

全体として被災地のことを考えると計画停電も通勤ラッシュも文句を言う場合ではないし、多少の不便は引受ける必要があります、それがすなわち「助け合い」である、という構成になっていると考えられます。結局、番組は被災地の苦難と首都圏の混乱とを比べることによって、不便さを受忍することが当然、という構成になっていると捉えられます。

## 2. 原発事故を扱ったニュース項目：No.2、No9、No14

計画停電、首都圏のラッシュなどに時間を割いている関係上、原発事故を扱う時間は少なくなっています。もっとも時間量を使っている No.2 は、スタジオに専門家を招いて話しを聞くという設定で、その中に官房長官会見、東京電力記者会見場からの中継を挟むという構成になっています。

- ① 情報源：東京電力記者会見、官房長官会見
- ② 映像の特徴:記者会見映像、資料映像として福島第一原発の事故前映像がクローズアップで使用されていますが、それ以外は、福島第一原発の映像は使用されていません。
- ③ 登場する専門家 齋藤正樹（東京工業大学教授 動力炉・核燃料開発事業団をへて大阪大学、東京工業大学へ。研究キーワードは原子炉安全性、核廃棄物消滅、超寿命原子炉。原子力安全委員会委員）
- ④ 福島第一原発の状況について何を伝えているのか
  - ・番組では主として2号機への注水が停止したために圧力容器内の燃料棒を冷やす水の水位が下がったが、注水再開によって安定した冷却へと向かっている、という2号機の状況にしばってニュースを構成しています。
  - ・3月12日15時に水素爆発を起こした1号機、14日11時に水素爆発を起こした3号機については、官房長官記者会見の中で触れているだけで、スタジオや専門家のコメントではその状況は取り上げられていません。
  - ・2号機については、東京電力が記者会見で、注水が停止して水位が下がり「空焚き」状態になって炉心の損傷の可能性を発表しています。

これを受けた記者会見場の新谷時子記者が緊迫した表情で「会見ではチェルノブイリのような事故が起こるのではないか、という質問が相次いだ」とレポートしていますが、スタジオでは、古館キャスターが「水位が上がっていることに希望を持たなければいけない、冷静に、空焚きというのと少し違う」と新谷記者の報告を打ち消すように応えています。

- ・ 放出している放射線量についても、「放射能は微量ながら出ているかもしれないが、とりあえず単位としては非常に少ない。」と具体的な数字をあげることなく、「微量」と断定しています。福島第一原発についても、建屋は崩落したが格納容器は守られていることを強調し、あたかも放射能漏れがおこっていないかのような伝え方になっています。

- ・ 市民へのアドバイスとしては、具体的に放射能防護について語っておらず、「冷静に」「落ち着いて」がキーワードとして何度も使われています。

### 3. 考察

3月14日の夜の時点では、2号機の冷却停止によって、格納容器の燃料棒が溶け、それが水と反応して水素爆発を起こすという事態が懸念されていました。番組は、水位が下がっていることや注水再開によって水位があがっていることは伝えているが、そのことの意味を語っていません。

格納容器の中には放射性物質が大量に存在し、水位が下がって冷却が止まれば水素爆発が予想されて、大量の放射性物質が飛散することになります。

このとき、ニュースにおいて「冷静に」「落ち着いて」とは誰に向かって語っていたのでしょうか。

3月14日深夜には、東電から政府に全員退避したいという申し入れがあったと報道もありましたが、事態はそれほど緊迫していたと考えられます。地震の影響でスムーズに退避するのは困難だったかもしれませんが、放射能被害が予想される地域の人びとに対して、「冷静に」「落ち着いて」退避する具体的なアドバイスこそが求められていたのではないかと考えました。

#### ●ゲストスピーカーからの発言

**司会** ここで、ゲストスピーカーのみなさんにこの間の報道についてどのようにお考えなのかについて、議論を深めていく意味でご発言をお願い

いします。

**井上輝子** 最初に感想ですが、5月末の反原発渋谷デモに参加した時に、疲れたので表参道のスタバで休んでいると、たまたまゴスマンさんと顔を合わせました。なつかしくてあいさつしましたが、お互い急いでいたので、ゆっくり話しをする間もありませんでした。どうしてゴスマンさんが日本のデモに来ていたのかなと思っていましたが、今日のメッセージを聞いてなるほど、と納得しました。ヨーロッパやアメリカのメディアでは福島原発の事故後すぐに、危険性を指摘する報道がされており、なるべく日本を離れるように、それが無理なら、せめて東京を離れて西の方に行くようにと言われていました。私もイギリスの複数の友人から、「大丈夫なのか。もし何かあればウチにしばらく滞在してもいいよ」というメールをもらいました。放射能の流れもドイツではマップを作って示していたということも聞いていましたが、日本では何となく安全だということだけが伝えられていました。チェルノブイリを経験したヨーロッパと「安全神話」で納得させられつつあった私たちとのギャップを改めて感じさせられました。

3月以降、大震災と原発について日本のメディアでの報道ですが、私自身、メディア・リテラシーについて勉強もし、授業もしてきましたが、今回ほどメディア・リテラシーの基本原則（「メディアはすべて構成されている」）を実感させられたことはありませんでした。この基本原則はもちろん頭で理解していましたが、今回ほどそのことが明らかになった報道はなかったのではないかと思います。

3月11日以降、私は鬱々とした気分になっていて外出もしなかったのですが、テレビを見ているとAC広告と、専門家といわれる人たちによる「安全です」「直ちには健康に影響がありません」というよく分からない説明が繰り返されていました。たまたまMLで知った原子力資料情報室の外国人向けの記者会見をユーチューブで観たのがきっかけで、ネットメディアを観ることになりました。実はそれまでネット上のメディアが若い人のものだと思って、ほとんど無視してきたんですが、実際に観てみると、大手メディアよりも、早く正確に、いま何がおこっているかを伝えていることがわかりました。それ以降、テレビはあまり観ずに主にネットで情報を取ってきました。たとえば、ネットメディアでは東電の記者会見を最初から最後までずっと報道していました。それを観たうえで、テレビを観るとごく一部のみを、かなり編集して出している。その落差を見て、メディアがいかに作られているかを実感しました。ほんの一部の情報を、その局の報道の文脈の中で位置づけて伝えている。他



のメディアもそうですが、特にテレビを観ていて、メディアがいかにか「作られている」ということを実感したわけです。今さら、こんな基本的なことを改めて発見するとは、メディア・リテラシーをやってきた人間としては恥ずかしい話ですが。

さて、今日は、具体的なメディアの分析を聞かせていただきましたが、テレビ局5局の夜の報道番組を丁寧に分析していただきありがとうございました。何となく同じに見えていたものが見比べてみると細かい違いがあり、共通点もある。分析してみるとCM量や招かれている専門家に偏り、映像とコメントとのずれ、現地の取材とスタジオとのずれがはっきりと具体的に分かり、興味深く聞かせていただきました。なんとなくの感想ではなく、分析することの重要性を実感しました。その上で、さらに考えるべきテーマを出させていただきたいと思います。

まず、テレビの位置づけの問題があります。今回の原発事故報道によって、活字メディアや、ネットメディアと比較して、テレビの位置づけや信頼度が変わってきたのではないかと思います。個人的経験からしてもインターネットメディアが大きな意味をもち始めました。インターネット上の情報とテレビの情報のギャップがかなりあったと思いますがそのギャップがどうして起きたのか。よく戦争中の「大本営発表」と同じだと言われますが、東電、保安院、官邸発表をそのままテレビが報じているという構図は否めない、なぜそうなるのかを考える必要があると思います。理由としては、記者クラブ制度の問題や、取材の範囲が限られていることなどに加えて、スポンサーの問題が大きいと思われる。個人的な印象としてはNHKがまだまじだったような気がしましたが、東電や電事連などの巨大なスポンサーがついている民放の場合とで、大きな違いがあったのではないのでしょうか。各局全体のスポンサーの構成がどうなっているのかを調べてみることもその手がかりになるのではないかと思います。

さらに、テレビでもキー局と地方局の違いもあるのではないかと思います。地方局との比較が、必要なのではないかと考えます。またテレビ以外のプリントメディア、新聞、週刊誌でどのような報道がされていたのか。テレビ自体を相対化する意味で他のメディアと比較し、その違いがどこから生じているのかを考えることがこれからの報道のあり方を考える上で重要ではないかと思います。

石塚さとし 今日、3月14日の報道分析を発表されるということでしたので、私なりに3月14日までの流れを振り返ってみました。3月11

日 14 時 46 分に地震が発生して 19 時 3 分に原子力緊急事態宣言発令、12 日には菅さんが現地の視察、1 号機の爆発がありました。9 時 55 分に保安院が燃料棒が一部溶け始めている可能性を示唆し、翌朝には各紙が「炉心溶融」と報道しましたが、その後、5 月 12 日に東電が発表するまでは、なぜか「炉心溶融、メルトダウン」という言葉が出なくなり「燃料棒の損傷」という表現となりました。先ほど、「大本営発表」という言葉が出ましたが、メルトダウンがなぜ燃料棒の損傷にすり替えられたのか、不可解です。

13 日には気象庁が M8.8 を M9 に修正、この日は日曜日でしたが朝日、讀賣は日曜夕刊を出しました。

続く 14 日には 3 号機爆発、2 号機の燃料棒露出、計画停電の実施となっていました。

さて、メディアは何を伝えられなかったのか、なぜ伝えられなかったのか、が主催者から私にいただいた命題でした。私なりの答えは、メディアは政府の「発表」を垂れ流し真実を伝えられなかった、それはなぜかと言え、記者が情報管理・情報統制に切り込めずにメディアが「自主規制」したのではないか、ということです。

では、なぜ自主規制をしたのかですが、3 つほどの要因が考えられます。私は、①「パニックが起きるから」という政府の考えを過度に付度したこと、②記者の科学的知識の不足や人材の問題、③「政・官・業」& 学+報+司の癒着による「安全神話」の構築という過去の経緯による萎縮が、その背景として考えています。

以下、いくつかの事例からお話したいと思います。

まず細野総理補佐官は、政府が真実を伝えなかったことに関して、「パニックが起きるから」と言いました。今回の一連の報道で、「何を信じてよいか分からない」「メディアが隠している」と言われましたが、それにはいくつか理由があると思います。1954 年「第 5 福竜丸事件」が起きたとき、メディアは「死の灰が降った」と報道しました。ところが同じことが起きているのに今回は「東京に死の灰が降る」とは報道せずに〇〇シーベルトなどという言い方をしています。神奈川県にも死の灰が降ったので足柄山のお茶から放射性物質が検出されたわけです。私はメディアはきちっと「死の灰が降った」と報道すべきではないかと考えます。

第 2 にゴスマンさんのメッセージにもありましたが、ドイツ、フランス、韓国、中国など外国の方が成田から帰国されたので、空港は山手線のような状況になったのです。しかし、メディアはそれを一切伝えてい

ません。この二つの報道がなかったことと、細野補佐官の釈明を批判しなかったことが、メディア不信を招いた最大の要因ではなかったかと感じています。

SPEEDI のデータ隠しも酷いことでした。NHK 教育テレビで「ネットワークで作る放射能汚染地図」という番組が放映され、私たちは真実を知ることになりました。研究者の調査に同行して番組制作者が浪江町に入り、政府が避難指示をしたことによって避難した地域が、実際には非常に汚染されている地域であったことを、番組を通して映し出されました。文科省は、3月15日の時点でこの地区が汚染されていることを知りながら、測定点の地名を発表していませんでした。30倍もの値が測定されていたのに、それを文科省は隠していたわけです。「公表するとパニックになる」と言っても、では「住民はモルモットにされていいのか」と言いたくなります。

次に事故レベルの問題です。3月18日まではレベル4、18日にレベル5に引き上げられました。政府はできるだけ事故のレベルを低く押さえたかったのです。4月12日になって、ようやくチェルノブイリと同じ事故レベル7に引き上げがされました。これについてもメディアの追及は弱かったのではないかと思います。

松本参与の「発言訂正」についてです。菅さんとの意見交換の中で「10年、20年は住めない」と言ったことが報道され、波紋が広がりました。それで、あわてて参与が自分の発言だと訂正をしたわけです。しかし、菅さんは別に間違ったことを言ったわけではないと思います。そのような現実を踏まえて新たな生活設計をするための施策が必要だと考えるのは、ごく当然のことではないかと、私は思います。こうした政府の腰のふらつきと冷静に見ることをしないメディアの姿勢が、問題だと感じました。

3月12日、水素爆発の時に記者が避難したという記事が、3月31日付けの東京新聞で報じられています。実際、福島だけではなく東京からもマスコミ業界関係者が関西方面に避難したという情報も仄聞しています。安全だと伝えながら自分たちは避難していた実態があったことを、押さえておく必要があると思います。

最後に「計画停電」についてです。2003年には、東京電力管内の原発17基すべてが止まりましたが停電はありませんでした。これについてもメディアがもっと追及してほしかったと思います。

N 簡単に自己紹介をさせていただくと入社8年目で社会部というところ

ろに所属し刑事司法を担当しています。震災の取材に直接関わっていたわけではありませんが、震災以降、多少感じたことを話したいと思います。震災当日は社会部員全員が本社にいて混乱のなかで仕事をしていました。被災地への電話取材（つながらないので徒労でしたが）、ツイッターでの情報発信のフォローや地図の作製、など紙面掲載の準備をしていました。このとき、記者自身の身の安全を守る難しさを感じました。震災当日に会社でテレビの津波映像を見て驚いたわけですが、この時にも現地の記者に連絡をして高台に避難ということ伝えていました。記者の身を守ることも難しいと感じました。

4月中旬から2週間、岩手県陸前高田市で取材をしていました。現地に入ってしまうと電話もインターネットも通じないので記者自身が情報にアクセスできません、携帯ラジオを持って情報を入手しようとしたが、自分がどんな状況にあるのか知ることが難しい状況があります。私も陸前高田市で被害にあった病院の4階まで行って帰りが分からなくなってひやりとしたこともありました。

メディア自身もいま何が起きているのかを把握するのが難しいということがあったと思います。今回、テレビ分析で発表ジャーナリズムが問題にされていますが、私はある程度それは仕方がないのではないかと思います。というのは、会見で政府や東電が何を言っているのかをまず報道することがメディアに課せられた役割ではないかと思います。が、その上で市民へどのようなアドバイスをするのか、さらに深める議論を立てていくのもメディアの役割だと思います。また、もっと多様な専門家を選ぶ可能性もあったと思います。ただ、原発を専門に取材している記者が少ないこともあって、日常的に専門家と関係を構築できていない上に、高度に専門的で科学的な内容であり、しかも専門家の中でも反原発と原発推進と二分されているという難しい点もありました。でも、もっと多様な専門家をお願いする可能性もあったかと思います。

ゲストスピーカーの発言に引き続いて、第2部では田島知之がファシリテーターを務めて、6月10日NHK「ニュース7」のトップニュースを用いながら、メディア・リテラシーワークショップで、「メディアがどう構成されているのか」を分析した。第3部では、1部、2部を受けて会場とゲスト、主催者との活発な意見交換を行った。そこでは、市民の立場からジャーナリズムの役割と責任について問う意見や、子どもたちの学びにおいてメディア・リテラシーにおける分析方法をもっと積極的に取り入れて、自律的な思考力を育成する必要性について発言があった。詳細は、報告書に掲載予定である。

（まとめ FCT メディア・リテラシー研究所 西村寿子）

★フォーラム記録についてお問い合わせがありましたら、FCT メディア・リテラシー  
研究所 ([info@mlpj.org](mailto:info@mlpj.org)) までご連絡下さい。